

庭野平和財団 活動完了報告書

1. 事業概要

- (1) 事業名：バリアフリーストイレ 12 基の設置
- (2) 活動地：カンボジア、バンティミエンチャイ州アンロンベン
- (3) 実施期間：2013 年 11 月から 2014 年 4 月
- (4) 共同実施者：

カンボジアで実施するための現地カウンターパートは、地雷禁止国際キャンペーン（ICBL）傘下のカンボジア地雷禁止キャンペーン（以下、CCBL）である。この CCBL は、1980 年代後半のタイ・カンボジア難民キャンプから始まり、キャンプ閉鎖後も国内数か所で障害者支援を実施しているイエズス会救援サービス Jesuit Relief Service ; JRS) が活動の一部としてその役割を担っている。CCBL は犠牲者支援の本部をシェムレアップ州におき、地雷犠牲者の多いタイ国境の 3 州にて犠牲者の訪問事業や車いすや杖などの製作および配布事業を展開、政府のデータベース作成にも貢献している。

当該プロジェクトの担当者は ICBL 大使も務めるトゥン・チャンナレット氏である。チャンナレット氏は、自身が地雷被害によって両足を切断した犠牲者で、世界中で開催される地雷関連の国際会議において、犠牲者の視点から廃絶活動の意義を述べ、会議参加の政府代表者に犠牲者の実情等を伝える役割を果たす一方、カンボジア国内の村々に暮らす犠牲者を訪ね、彼らの相談にのり問題解決のために奔走している。

(5) 活動の目的

- ① 身体障害（主に下肢切断）をもつ地雷犠牲者の自宅にバリアフリーストイレを設置することによって、彼らの生活環境の質のうち特に衛生面の改善を図ること。
- ② バリアフリーストイレを通じて生活上の負担が軽減した本人あるいは家族の社会参加が増えること。

2. 活動報告

(1) トイレの設置

事前調査において、地雷の犠牲者が多く住み、バリアフリーストイレの設置が彼らの生活向上に役立つと判断されたバンティミエンチャイ州アンロンベンに住む 12 世帯において、トイレ小屋の建設と洋式便座を使用した浄水式トイレの設置を実施した。

当該地区は、タイとの国境に近く、昨年にもクラスター爆弾が使用されるなど（註・タイ/カンボジア両国が使用を否定。しかし状況からタイによる使用と判断され国連からタイ政府に調査が命じられているが未実施）地雷および不発弾の被

害が最もひどい地域のひとつである。しかし、カンボジア国内の NGO 活動が都市部かそこからのアクセスがよいところに集中しており、支援活動がほとんどなされていない状況であった。

トイレの設置を求める声は多いが、今回は事前調査のインタビューで、①地雷被害者が家族にいること、②トイレを設置する土地のある家があること、③世帯収入が少なく自力でトイレの設置が見込まれないこと、④トイレをメンテナンスしていく意思のあること、を確認して、リストのうち、世帯収入の少ない人から 26 世帯を抽出、本助成金を使ってはそのうち 12 世帯のトイレ設置を決めた。12 世帯すべてがトイレを持っていない世帯であったため、トイレの小屋とトイレ、および 2 つの浄化槽を新設した。

工事にはコンクリートの乾燥工程が入るため、実際の建設は雨季が完全にあけた 2013 年 12 月に着工した。工事には、可能な限りトイレを受け取る障害者本人が参加することを業者に求めていたため、ほとんどの人が実際の工事に関わった。

（２）完成したトイレのモニタリング

現地担当者 2 名と JCBL の担当でトイレが完成したすべての家庭を訪問し、本人および家族のインタビューを実施した。

地雷の犠牲者のうち男性は全員が元ポルポト兵で任務についている際に、女性は兵士に食料など物資を届ける任務についている際に地雷を踏んで身体の一部を欠損する障害を負っていた。彼らは事故の後には、「移動式クリニック」と呼ぶ医療チームにより森の中や簡素な設備の建物（病院ではなく軍の拠点にしている小屋のようなどころらしい）にて切断手術を受けたという。ほぼ全員が義足は、バタンバン州の ICRC（国際赤十字委員会）から、杖や車いすは既に活動を終了してカンボジアから撤退したハンディキャップ・インターナショナルおよび本プロジェクトのパートナーである JRS（イエズス会救援サービス）から受け取っていた。

新設されたトイレ小屋はレンガ製でスチールの屋根、市販のドアを取り付けたものになっているが、このドアの品質が悪く、ノブが機能しないトイレが数点あったので、業者に取り替えを依頼した。本人から業者に不具合を伝えるようにと話したが、遠慮して言いにくいというので、業者には不具合の修理には無料で応じることも合わせて話し承してもらった。

トイレを使い始めた感想には、以下のことがあげられた。

- ・離れた場所まで行かなくてもよいので楽になった。
- ・雨季には特に楽になるだろう（訪問時は乾季）
- ・長いことトイレがほしかったがあきらめていた。子どもにトイレを使わせられるのが嬉しい。
- ・健康的になった感じがする。
- ・家の周りがきれいになった。
- ・近所の人たちも使っており、感謝されるのが嬉しい。
- ・使いやすくてよい。

- ・水をためるバケツ（トイレを合わせて配布している）が小さい
- ・カンボジア式のトイレだと義足が滑って使えないのでトイレは持てないと思っていたが、洋式トイレができて安心した。
- ・トイレができたので、生活を良くするようにこれから努力する。

（３） トイレを設置した世帯

No	本人の名前	生年	性別	受傷年	障害
1	Oun Sphol	1961	M	1987	右足切断
2	Ly Thear,	1961	F	1985	左足切断
3	Kranh Kroem,	1962	M	1990	左足切断
4	Oem Den,	1975	M	1990	右足切断
5	Preab Somnang,	1966	F	1983	左足切断
6	Soek Dein,	1967	M	1988	左足切断
7	Phan Som Oun,	1964	M	1984	左足切断
8	Chaun Chun,	1970	F	1990	左足切断
9	Krun Pak,	1952	M	1989	右足切断
10	Khut Raun,	1969	F	1987	右足麻痺
11	Kei Kai,	1959	M	1990	左足切断
12	Trorng Chun,	1961	M	1988	左足切断

3. 活動の成果

プロジェクトの目的である、「日常生活における衛生環境の向上」は、トイレの設置とその使用によって確実に達成することができる。本人および家族の身体的な衛生、家の周りの環境の衛生の確保、以前と比べての変化は本人たちのコメントからも聞き取ることができた。カンボジアは元々水が豊富にあり、訪問時は乾季の最中であつたが、井戸が干上がることもなく、どの家庭もきれいにメンテナンスができていた。

もうひとつの目標である「負担が軽減した本人あるいは家族の社会参加が増えること」については、もう少し長い時間をみて評価する必要がある。本人の衛生によって健康が保たれることが、社会参加につながることは想像できる。また今回トイレを受け取ったある人が「この地域では障害者もみんな仕事をしている」と話していた。ポルポトの支配が長かった地域なので、共産主義的なものが残っていて、障害があっても仕事をするということは他の地域よりも進んでいるということのようである。仕事は他の人の田畑を手伝ったり、家の前に小さなお店を出して日用品を売ったり、養鶏をしたり、さまざまであつたが、これらの仕事をする上でも家の周りがきれいであることはプラスに働くので、

トイレがあることが仕事にも好影響になることを期待する。

4. 今後の課題

① バリアフリートイレ設置への理解の促進

トイレを設置する、という事業は実施が困難である。その大きな理由は「トイレは個人のもの」と考えられ、その設置は「国際協力すべき事業」と認識されにくいことにある。しかもそれが「障害者支援」となるとなおさらである。しかし、実際には、国際協力で実施しなければ状況は改善しない。

ミレニアム開発目標（MDGs）では、2015 年までに「トイレのない人」の割合を 1990 年と比べて半分以下にすることが目標にあげられている。その元で、いくつかの国では政府の施策あるいは国際協力によって「水と衛生」の状況改善が図られ、1990 年から 2010 年の間に 18 億人の人が適切な排泄設備を持つに至った。これは、明確な目標をもって取り組みれば、状況は改善することを明らかにしている。しかしながら、MDGs の中間報告の際に、このペースではトイレの普及は目標を達成できない恐れがあると発表された。

WHO は、「世界の 80% の国が安全な水を得る権利を理解しているのに対し、トイレの権利を理解しているのはその半分である」と警告している。実際に水とトイレの状況に改善の必要がある国のうち 3 分の 1 が安全な水のプロジェクトに予算を付けているのに対し、トイレに予算をつけるのは 5 分の 1 の国という報告である。

トイレ普及が進まない第一の理由には、長い習慣を変えることへの抵抗が考えられる。たとえその必要を理解しても、何らかの行動を起こすまではしないという傾向である。特にトイレを求めているのが障害者である場合、社会的弱者である障害者の声は無視されがちである。

次にコスト面がある。カンボジアの例をみてもわかるように、家を建てる時に同時にトイレを作っていないところで、あとからトイレの建設をするのはコストがかかる。トイレがない地域が圧倒的に途上国の貧しい人たちの居住区であることから、この問題は深刻である。彼らが自分たちだけの力でその費用を捻出することは期待できない。

このような問題の解決には個人のレベルではなく、集落、村、さらにその上の行政区といったコミュニティレベルでの取り組みが必須だが、コミュニティへの働きかけを誰ができるかということになると、貧しく教育も受けておらず、自分たちには基本的な必要を満たされる権利があるということを知らない人たちにそれを求めるのは難しい。

MDGs で達成すべきことのの一つになっていても、各国の開発計画や援助計画の中で、「トイレ」の優先順位は低いか入っていない。既にトイレを持っている人たちにとっては問題が見えにくく、さらに現状でもひどい状況をうみながらも日々なんとか処理されている問題であるため

に、早急に解決せねばならないと援助者に気付かれていない問題なのである。

また、トイレが個人のものであることであるという考え方が支援を難しくしている。開発協力ではよく「魚をあげるのではなく魚の取り方を教えよう」とたとえ話で言われるように、災害救援や難民キャンプの支援など緊急援助ではない場合、個々人にモノをあげるのは依存心を高める恐れがあり、彼らの状況を改善しない弊害が大きいため避けるべきであるといわれる。「自ら手に入れたものは使うが、人から与えられたものは使われない」ということもよく言われる。しかし、途上国のトイレの問題を解決しようと考えた時には、これらのアドバイスが当てはまらない。当該プロジェクトにおいては、本人の健康と居住環境の衛生面の改善が目的であるのだが、トイレが各世帯に設置されるため、「個人へのプレゼント」のような印象を与えてしまい、本来の目的とその成果が注目されにくい。

当該プロジェクトは、「個人へのプレゼント」というチャリティプログラムではない。開発援助の基本である「住民参加」で人々の意識変革をおこし、障害者を含む地域の人々の環境改善及び健康維持を進めるプログラムであり、このような犠牲者支援が地雷対策の中で行われるということへの理解を進め、同じような活動が広がることを期待する。

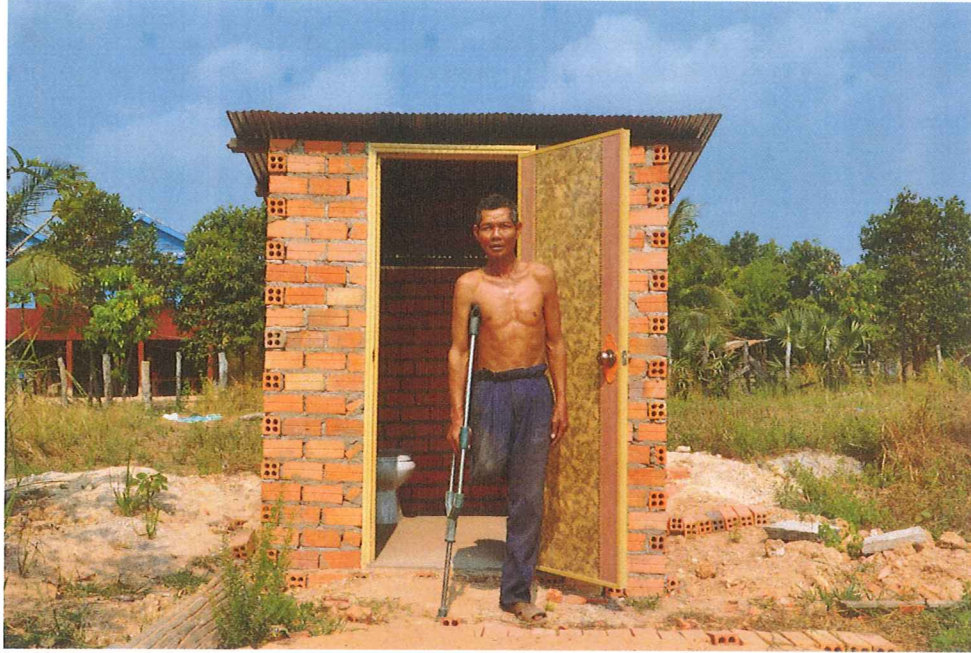
② 長く使えるトイレにする

今回設置したトイレはすべて新しいものであり、すべての設置者がきれいに使用していた。しかし、これまでに設置したトイレを見ると、中には壊れたまま放置されているものが少数ではあるが存在する。

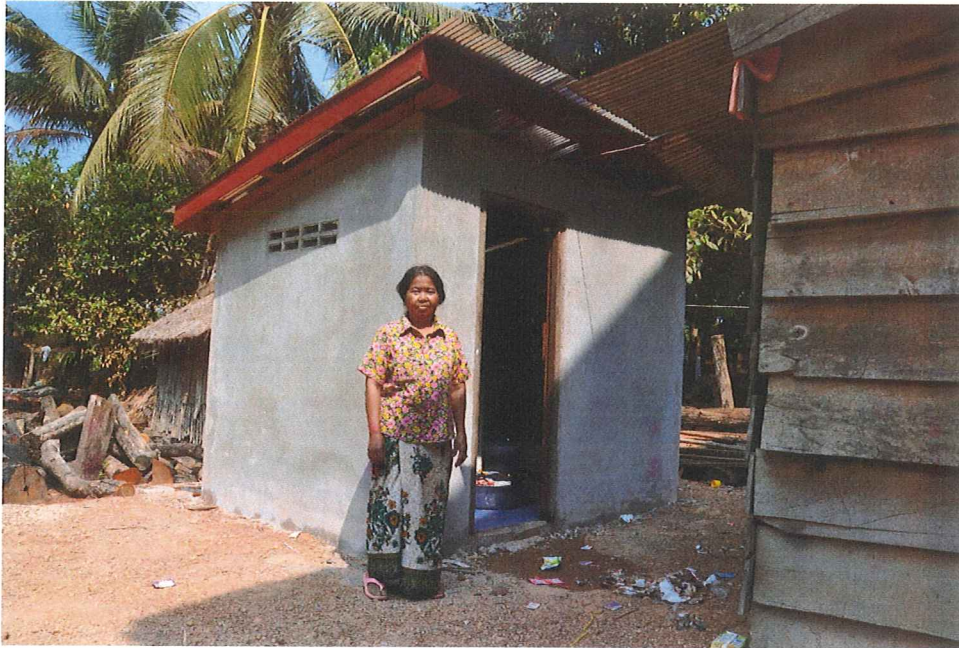
もっとも壊れやすいのは、便座のプラスチックである。これは現地で入手可能なものの品質の問題である。当該プロジェクトで設置したものでなくても、洋式便座でプラスチックの便座が壊れて外れているトイレが多い。もともと壊れやすい質であることに加えて、使い方にも若干の問題がある。たまたま訪問の際にトイレで洗濯をしているうちがあったのだが（カンボジアではトイレで水浴びや洗濯をするのが通常）、ただでさえ弱いプラスチック便座の上に、洗濯物をいれて重くなっているタライをのせていて、あわてて「壊れちゃうから便座には重いものを載せないで」と声をかけたことがあった。ほとんどの人は洋式トイレを使用したことがないので、「プラスチック部分が壊れやすい」という認識もないのである。そして壊れてしまって使いにくくなるとつかわなくなる、という悪循環に陥る。そんな彼らでも「トイレをいらない」と考えているのではなく、ただ長く使う方法を知らないのである。トイレは定期的に掃除をして、水を用意し、常に清潔な状態に保ち、壊れたらメンテナンスをしながら、長く使う、という方法を含むトイレの利用の仕方について住民と一緒に考えて、住民がトイレの必要を本当に理解するように

働きかけることが、このような問題解決につながると考えられる。しかしこれは辛抱強く取り組まなくてはならない地道な活動となるだろう。

5. 活動の写真



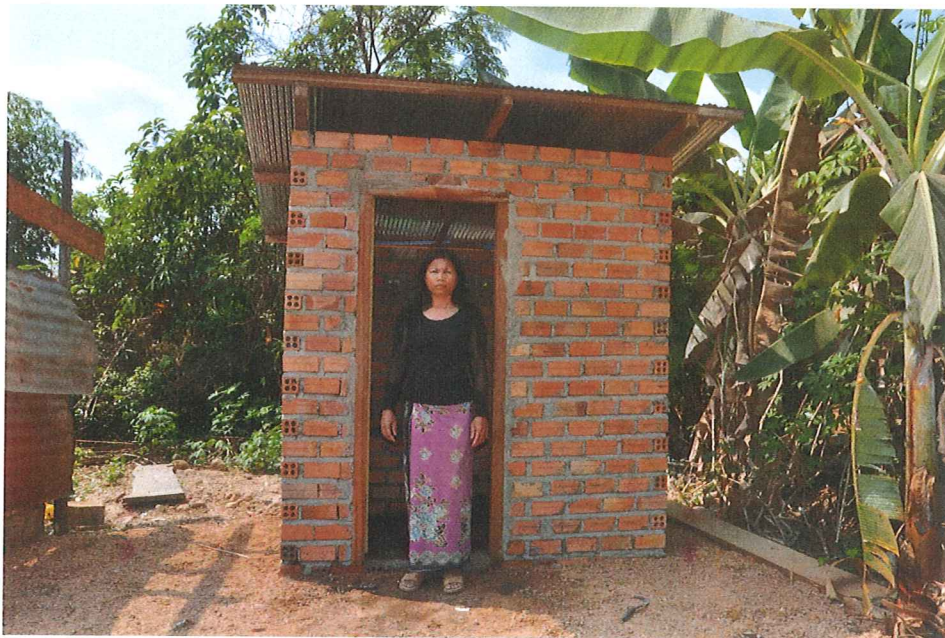
出来上がったトイレと片足義足の地雷犠牲者。



出来上がったトイレと片足義足の地雷犠牲者。トイレの中で洗濯をしている様子が見られる。



付け直したドア。バリアフリースイトイレには引き戸が理想的だが、日本のトイレ業者によると、引き戸は日本で発達している技術で、カンボジアの業者は「見たこともない」というので、引き戸の設置はあきらめた。



片足まひの地雷犠牲者。